

# 明珠

龍泉院  
參禪會會報

## 從容録に学ぶ (四四)

### 第六三則 趙州問死

〔示衆〕

衆に示して云く、三聖と雪峰とは春蘭秋菊なり。趙州と投子とは卞璧燕金なり。無星秤の上は両頭とも平らか。没底缸の中は一処が渡れる。二人の相見の時は如何ん。

〔本則〕

拳す、趙州、投子に問う、「大死底人が、却に活る時は如何ん？」(探竿の手在り。)  
「夜行を許さず、投明に須らく到るべし。」(影草を身に随けり。)

〔頌〕

芥城劫石、妙に窮まる初め、活眼環中を廓虚と照らす。  
夜行を許さず、投曉に到る。家音未だ肯えて、鴻魚を付らず。

今回はまた趙州さんが主人公。「從容録」百則のうち、各則の主人公は雲門が一三回で最多、ついで仰山が八回、第三位が趙州の七回ですが、今回は三度目の登場。いうまでもなく、この方は六〇歳で出家して二〇年間の行脚のち、八〇歳で趙州観音院に住したというスーパーマンでした。居住した州名で呼ばれるほどの人物で、その『語録』には五二五篇もの機縁を収めますが、なぜかこの投子との問答は含まれていません。

その投子とは、唐末に安徽省投子山に禪道場を開いた大同禪師(八一九〇九一四)で、青原―石頭―丹霞―翠微―投子と承ける青原系統の英傑です。当時は北に趙州、南に投子といわれたほどの方。趙州さんのほうが三〇歳も年長ですが、行脚で投子山に訪れたときの機縁です。

なお、この則は「示衆」も「本則」も短いので、ここでは「頌」もとりあげました。「頌」は先祖の機縁である「本則」を、宏智さんが詩の形で詠んだ「ほめうた」です。この「頌」に対する万松さんの著語は割愛します。



趙州問死

まず、「本則」をみましょう。

「三聖慧然と雪峰義存は春蘭や秋菊のようで、趙州と投子も宝玉と千金のようで、ともに甲乙つけがたい大先生方だ。到底、ハカリになんかかけられん。だから、無執着の舟はみな悟りの救い手だ。彼等の出会いのときを見ようじゃないか。」

ここに出てくるもう一組の三聖と雪峰とは、それぞれ臨済と徳山の法嗣であって、これまた唐末の禅匠たち。両者の機縁は、すでに第三三則「三聖金鱗」でご紹介のとおりです。つぎに「本則」です。

趙州が投子に「すべてを捨て去った者が逆に大活を示すありさまは？」と問うた。

投子「コンドロみたいな夜歩きなどせんで昼間おいでなされ。」

ただこれだけですが、並ではありません。よほどの力量がないとできない応答ですね。まず「大死底人」が眼目。ただの死ではなく生きたまま本気で死に切ること。禅では、私たちの心にしみついているすべてのとらわれや分別を投げ捨てたとき、はじめて宗教的な真理が体得できる、とされます。大死一番とか百尺竿頭から一步を進めよとか全身放下など、みな心中にいだくあらゆる分別妄想をや



投子山遠望（日本の田園風景さながら）

めなさいということ。そのときこそ、マッサラな目や耳でモノや道理を正しく観察し、最高の対応ができるからであります。この辺の消息を、わが近世末の仙崖さんは「生きながら死人となりてなりはてて思いのままにするわざぞよし」と詠っていますね。自由自在にふるまえるすばらしさの謳歌なのです。

じつは、こんな境地を百も承知の趙州が、あえてこれを投子にぶつけた。そこで万松は

「探索の手」つまり「さぐりを入れたナ」とコメント。だが、投子もさる者、「夜行のコンドロではなく昼間おいで」とは、「迷っている」と足元の真実が分からんぞ」という意味。だから万松は「漁師の魚具を身に随ける」というたとえで、禅匠はさまざま手段で修行者を導くワイとコメントしたのです。さすがの趙州も二の句をついでいません。さて「頌」。

「趙州の活眼は時を超えて、大空をカラリと照らしぬき、投子は死も活も超えて徹底、もう両者には音信はなくても心は通う。」

宏智の両者に対する評価は、まことに至当。それこそ禅門のお手本だというほめうたです。人は死ねば無執着。だけど、生きている間に捨てるのは至難のわざ。モノではなく心です。金や財や役職や名が…という欲望です。これらをどうコントロールするか。坐禅ですね。

私は一〇代に猛烈な厭世観から自死を意図したことがあります。身辺の品々を焼却後、死ぬ前に某師の「死ぬ気でやってみろ」に目覚めました。もう何も恐れず勇気がモリモリと。一度はこんな経験も悪くないですね。高校までの物品無一物が今となって悔やまれるのは、まだ坐禅が至らないからでしょう。どうもレベルの低いお恥しいお話で恐縮です。

# 第二六回成道会

## 吉岡大龍さんの出家得度式



「釈尊が山中における六年間の修行の末、里に下られ菩提樹の下で坐禅三昧に入られ、一二月八日の朝、明星を見て、大自覚を得られ『仏陀世尊』になられた事に由来した曹洞宗の一大行事であります。」という参禅会会員への案内により、一二月七日九時より第二六回の成道会が行われました。

当日は快晴に恵まれましたが、この冬一番の寒さとなり、山門を入ると境内は真っ白に霜柱に覆われ、本堂前の手水鉢の水は固く凍っています。境内はびんと張りつめた空気が漲っています。

まずは二炷の報恩坐禅が行われました。いつもの参禅会とは違った雰囲気です。一〇時三〇分放禅の後、まず龍泉院梅花講員一同により、大聖釈迦如来成道讃が奉詠され、椎名老師を導師として、会友配役により厳かに成道会が始まりました。導師により釈尊の成道を讃える拈香法語が述べられ一同参拜、般若心経の唱和と続き、例年の通り老師に対する問答が参禅会会員、梅花講員により行われました。

引き続き、参禅会会員の吉岡伸夫さんの出家得度式が椎名老師を戒師として、会員の介添えにより厳修されました。出家得度者は、

参禅会発足より三七年間、佐藤友則さん、伊藤幸道さんに続いて三人目となります。参禅会より出家得度者が出ることはまことに奇事なことと会員一同喜びも大きく、感激にたえないことです。また、龍泉院の檀家様からの出家得度は、約一五〇年振りだとか。

白装束の吉岡さんは得度式の差定に従って剃髪、「大龍」の安名授与、坐具・衣鉢の授与と進み、菩薩戒を授けられ、滞りなく終わりました。真新しい法衣に包まれた吉岡さんに、参加者一同深い感銘を受けました。

吉岡さんはこの日の朝、緊張のせいかギックリ腰になったそうですが、得度式が進むにつれて腰が伸びるようになり、杉浦さんたちの介添えもあって、出家得度式を滞りなく催すことが出来ました。

式をおわるにあたってご老師からは、「吉岡さんから九月始めに、突然出家の意向を伝えられましたが、僧侶になるのは容易なことではないと確かめました。吉岡さんの決意は大変固く、しかも家族の方も同意されていました。そこで小畑さんに、できれば成道会に併せて、出家得度式を行ないたい旨を相談した所、一回でも参禅会で坐禅されれば、立派な会員ですと、ご快諾をいただきました

ので、今日皆様方のご協力をいただいて、無事得度式を成就することができました。

吉岡さんは鍼灸師と介護士のお仕事をされていましたが、新しく生まれ変わりたいということで、出家されました。法名に俗名を一字でも入れることを希望されるかお聞きした所、きっぱりと、『いりません、坊さんらしい名前を付けてください。誰から見ても坊さんらしい名前を付けてください』言われましたので、私もこれとは思って、考えたのが大龍です。大龍和尚は体力があり、その上、優しさ・真面目さ・素直さの三つの徳を備えています。これを土台として、禅門の修行を勤めていただければ、素晴らしい禅僧になれると思います。皆様の期待に沿ってほしい。」と、励ましのお言葉がありました。

また、小畑代表幹事からは、参禅会から出家得度式が二回相続されたのは大変有難いことである旨のご祝辞がありました。最後に大龍和尚より、大龍という素晴らしいお名前をいただいた感謝の辞がありました。

その後、点心(お昼のご飯)を松井典座と何人かのお手伝いで準備され、五観の偈をお唱えして頂き、茶話会と、一連の行事は滞りなく済みました。

年々盛んに行われるようになった成道会は、担当会員の周到な準備と熱意で、年々素晴らしい行事となってきました。

龍泉院の参禅会は、これらの行事を通じて、ますます発展していくことと思います。

## 四三歳、私の出家得度式

柏市 吉岡 大龍(伸夫)

七月に「鯉の滝登りだよ」と、事務長に送り出された次の移動先は、八月末で閉鎖になる療養型介護病棟だった。私が会社を辞めることになった組織内の問題はさておき、自身の内面では、どこかに意図して変えたこともあった。だから退職理由は会社都合とも私事とも言えない。私生活でも、例えばもつとお金持ちになりたいと思う反面で、池波正太郎の時代小説の表紙にある、行燈と火鉢だけの質素な生活を描いた絵に見入り、余分な物のない生き方も空想していた。ある日それは急に介護支援専門員を終わることから始まった。

柏ふるさと大橋を渡つての帰り道が、九月から出家の日まで続いた。ここの橋から眺めると、遠く手賀大橋まで手賀沼が見え、下を覗くと鯉や色々な魚が棲んでいるのがよく見



椎名老師へ焼香

える。仕事を辞めてからは叔父の店を毎日手伝い、そして運動の為にひと駅先の北柏から歩いて帰った。橋

から見える自然は素晴らしい風景で、夏から秋へそして冬と季節が変化したが、魚はいつもの顔ぶれのように、あまり変化はなくそれはそれでよかった。

いよいよ出家得度式の朝、電卓を取ろうとしてギックリ腰になってしまった。すぐに腰痛ベルトをして動かすと、痛みはそれほどでもないが、体がくの字に曲がり伸びない。腰の痛みをこらえて漸く龍泉院に着く。

成道会から直に得度式へと続くので、御老師様と配役の方は忙しい。入場では緊張しないように、ゆっくり何も考えずに集中した。幸道和尚様の出家得度式のビデオを何度も見



初めて袈裟をつける大龍和尚

ていたが、実際の儀式では介添えの方にいろいろお世話になり、皆様に見守られて、ほのぼのとした中にも、厳肅さが溢れていました。名前を頂いた時がとても嬉しく、昨日まで過去や未来を思い萎れていたのが、この瞬間から消えてなくなりました。

翌日の月曜日、松戸家庭裁判所へ名前の変更を申出に行き、金曜日に申請書類を揃えて提出しに行く。私は話が長くはないが、なぜか一時間二〇分説明することになった。女性の係官はまず職業から聞いてきた。係官が

「寺の息子じゃないのになぜ出家するのか」と質問されたので、「いや寺の息子じゃなくても出家はできますよ」と返すと、「だからそれを説明して下さい」と話が少しづつ長くなった。

係官は、この人は僧堂修行後どこにいるのだろうかと思ってくれたのか、「吉岡さん戸籍を変えらるってことは大変なことですよ、一度変えて、また戻すことはできないですよ。申請はできるけど後悔しないの」と、面接を一時間も長くかけて、よく考えたのかと何度も確認しているようだった。

出家の理由はひとつだけではなく、  
① 今まで築いてきたものが崩れてしまったので、何か他に勉強したいと思ったこと。

② 節目に入ってもう欲望を捨てる年頃になつたと感じたこと。

③ 選んだのは自分のため、一人で出家をしてからひっそりと暮らそう。

④ 自分が本当に望むものは、休日には寛いだ神社やお寺の自然がずっと残り、静かで平和な環境をお守りしたいことである。

「自分の為に出家しよう」そう考えていた

のですが、大勢の方にご協力を頂き、その後も皆様に声をかけていただいていると、すべての行いは自分と他人のためになることだと気がつきました。皆様が静かで平和に暮らせますように、常に厳しい選択をして、何時か「酷い目にあつた話」をしたいと思います。ります。

平成二〇年最後の参禅会は、大掃除をした後、お餅入りのお蕎麦を頂いた。また庭の掃除中に、会員の方から「大丈夫、すべては土に帰ります」と、ヒントを頂いた。

岩波文庫『ブツダ神々との対話』（中村元著）は、私が出家を決意した本です。この本を読んで、今まで読んできた本は何だったのだろうかと思いました。そこには、自分の歩んできた人生があり、これからどうすればいいのかということが、書いてありました。

「友よ、わたしは立ち止まるときに沈み、あがくときに溺れるのです。わたしはこのように立ち止まることなしに、あがくことなしに激流を渡つたのです」。

## 成道会に参加して

柏市 田上 淳一

一二月七日に成道会が行われ、私も初めて

参加させていただきました。お釈迦様の悟りを記念するその日の坐禅は、いつもにも増して張り詰めた気持ちになりました。緊張してウトウトしてしまいました。

さらにその日は、出家得度式も併せて行われました。参禅会の会員の一人が出家するということでしたが、式の途中まで、白装束で現れたその人が誰なのか、全く分かりませんでした。終わりに近づき、ようやくそれが吉岡さんと気付きました。それくらい、一緒に坐禅をしていたころの吉岡さんと、大龍和尚になられた後の姿は、発するものが違っていったということでしょう。

このように、私たちのあり方は、本人の決意と周囲の人との関係が変わることによって、変わっていくのだと思います。

これが縁起の考えなのだろうと思います。ところで、その数週間前にも、プライベートな失敗がありました。自分の言動によって相手が苦しみ、相手の反応によって自分が歪むということが。後から振り返って、これも縁起の一つの現れなのかもしれないと思いましたが、後の祭りというものです。

このように、生き方の問題として、縁起の考えを納得しても、一方で理論的には分から



初めての問答に挑む田上氏

はずで、その中で、過去の自己と今の自己との連続性を、どう位置づけるかです。

そこで成道会の最後に、ご老師との問答が設けられていたので、その点を伺ってみました。それに対してご老師のお答えは、今の自分が絶対であるというものでした。こうして私の最初の禅問答は、問いの視点と異なる視点を示されて、終わりました。

以上のように、様々な初めての経験をする事ができた一日でした。成道会に参加できなかっただけでも、学ぶことが多かったのに、さらに問答の機会も与えられて、いくらか理解が深まったような気がしました。

## 心のももしび

柏市 永野 昭治

千葉県曹洞宗青年会主催の第三〇回記念攝影会が、平成二〇年一月一八日から二一日までの四日間、静岡県掛川市少林寺住職井上貫道ご老師を講師にお迎えして、乾坤山日本寺に於いて催されました。

当山は、安房郡鋸南町の街並みを眼下にする、幾多の峻嶺に護られた雄大な景勝地にあつて、聖武天皇の勅詔をうけて、行基菩薩によつて開基されました。爾來、良弁僧正・慈覚大師など多くの名僧が訪れ修行した、我国でもまれにみる古刹であります。しかしながら、昭和一四年秋、不慮の災禍に見舞われて、堂宇の悉くを失つてしまいました。現在は千三百年の歴史に輝く名刹の復興を願つて、懸命の努力を重ねている参禅道場であります。

禅は「実践の宗教」であり「実践は坐禅」であると示されています。まず自分で動いてやってみることが一番大切であり、何でもいから行動してみる。それをするうちに実感するものが現われてくる、という至言に従つて、あらたな体験をすることとなりました。

参禅者は、井上ご老師をはじめとする僧侶

の方々と、私達七名を合わせて約二〇名をこえ、記念攝心会に相應しい会となりました。仏祖諷經に始まり、暁天の止靜①②、朝課、小食、作務、止靜③④、ご提唱、止靜⑤、中食、ご提唱、止靜⑥、行茶、止靜⑦⑧、晩課、薬石、止靜⑨、独參、止靜⑩、開枕と、四日間で三〇炷の坐禪を重ねる差定は、私達の一夜接心会と全く同一でありました。ここに、井上ご老師ご提唱の趣旨の一端を述べさせていただきます。

#### 井上貫道老師講話（抄）

現代社会は科学技術の進歩によって、人々の暮らし向きは豊かで快適で便利になりました。にも拘わらず人々の心は必ずしも満足されることなく、色々な場面で悩んだり、苦しんだりしております。昨今は、虐めや、自殺、不正を働く人が増えており、大変な社会問題となつています。仏教こそ混迷する世の中を救う突破口になると確信しております。

生まれてこの方、片時も離れずにいる大の仲良し、それは自分です。自分のことは自分が一番よく識っているようで、実は一番知らないのかもしれませんが。仏の道においては、まずこの自分が問題となります。自分とは何か、私は何者なのか、自我意識とは何か、な

ぜ自分はこの自分を自分と思うのか、この自分を明らかにすることこそが仏道研鑽の出発点であります。

ここで、「心」についてさわり程度のことをみておきましょう。「心」とは、思い、判断し、対象を感得することと言い伝えられてきました。禅では草も木も瓦礫も「心」と説きます。非常に幅が広いのです。道元禪師さまは、世界は私達のところそのものであり、それゆえに万物、全存在、全時間を「心」と示しております。そして自分と他人、自分と大自然（環境）を切り離すことのできないものとし、これこそが真実のありようであると説き明かしております。いよいよ、四六時中一緒にいる自分（からだ・こころ）をあきらめることが大切なこととなりました。

自分自身の顔を直に見た人は居られますか。ほとんどの方は鏡や写真をみて、これが自分の顔だと認識されています。疑わないのは何故でしょうか、何処で真に納得しているのでしょうか。

グリム童話の「白雪姫と七人の小人たち」の物語を思い起こして下さい。雪のように白い美しい姫を妬み、四度も亡き者にせんと謀る継母と、姫を介抱する七人の小人たちのお

話です。

継母は妃として嫁ぐ際に、美しい鏡を持参していました。鏡の上縁には、ライオンの顔が浮き彫りされていて、ラテン語で、「真実の口」の意味の文字が鏤刻されていました。継母は所業のたびに、その鏡に向かって問いかけるのでした。

「鏡よ、壁の鏡よ、誰が一番きれいかえ」  
鏡は答えます。

「お妃、ここではあなたがきれい、けれど、丘のむこうの七人の小人の家で白雪姫は、まだ生きていて元氣、姫ほど、きれいな人はいない」

白雪姫が継母によって、危うく一命を失わんとする時、優しい王子に救出されて、めでたく妃に迎えられる幸せに暮らします。継母は王子と美しい姫の結婚式の日、真赤に焼かれた鉄の上靴を履かされて、最期まで踊らなければなりませんでした。

私達は日常生活で、往々にしてものを歪めて見たり、自分の都合に合わせて解釈したりしています。鏡には全ての像を、人間のうちに内在する我執は言うまでもなく、あるがままに映し出して、一切を明らかにする智慧があると云われています。

- 鏡の有りようは必ず今の相のみです（一面なり二面なし）
- 次から次へと移り変って行くと云いますが、入れ替わるような気配はありません（春過ぎて夏来たると言わざるは、仏法の定まれるならいなり）
- 隠したのでもなく、捨てたのでもなく、取り替えたのでもない
- 新しくなりますが、前のものが何処にもない程に変わります。比べたくても比べるべきものさえ残しません（これを大清浄というのでしょうか）
- 手のつけようがありません。手をつける必要がないのです（纔かに是非あらば、紛然として心を失す）
- 増えもしなければ減りもしません（不増不減です）
- 綺麗になったのでもなく、汚れたのでもありません（不垢不淨です）
- 前から有るのでもなく、今現われるのでもない（不生不滅です）
- 縛られて自由がきかないという事もあります（大解脱体です）
- 自分のことと他人のことがゴチャ混ぜにはなりません。混乱を生じません

- いつまでも取っておこうとしても、取って置けません（過去心不可得 現在心不可得 未来心不可得です）
- 寂靜（いつも静かです。嵐の時は嵐、雨の時は雨、晴の時は晴れ、雪の時は雪です）

疑いは己を滅ぼす鉄錆のようなもので、自分の中から生じます。誰か他人が疑いを起して問題にしているではありません。日常の有りと有らゆる問題は、必ず自分自身の上で発生しています。人が若し疑いや苦しみを招くとするならば、この鏡の示す真実の相を蔑ろにして、もつと確かな本物が何処かにあると思つて、邪念を起すからでしょう。是を煩惱妄想というのです。火を消そうとするならば、火元に向けて消火活動をしなければなりません。今煩惱の炎は各自自分の中で盛んに燃えています。間違つても「あいつが」「あれが」「これが」と火元で無い余所に向けて、消火活動をしてはなりません。お大事に、気をつけてお過ごし下さい。

と結ばれました。

人はものを見たり、声を聞いたり、香りを嗅いだり、食べ物を味わつたり、冷たいとか、暖かいとかを肌で感じたり、そしてこれらを



最後列左から五番目が永野さん

認識する能力をもっています。これらの働きは実に大切です。しかしながら、これらの働きが素晴らしい働きであっても、迷いや惑いを作りだしている原因でもあります。煩惱や欲望という根の深い執われから解き放されて、よりよく生きるためには、日々の衣食住の営みを顧みることが不可欠であります。日常の営みは、自分以外の多くの人びとや、動植物とのつながりの中で成り立っているという現実と、どのように向き合うかということに気

付かせてくれたのが、この度の攝心会であったと思います。

日頃からご慈愛に満ちたご指導を頂く椎名ご老師は言うまでもなく、参禅会の方々との衆縁に深く感謝するほかありません。いよいよ、正身端坐をただ黙々と続けるのみです。霧の中を行けば、覚えざるに衣しめる

(正法眼蔵随聞記) 合掌

## 此娑婆世界は極樂淨土なり

『正法眼蔵』九五巻を写し終って

流山市 久光 守之

雲一つ無い秋の澄空を映した海の岩の上に、私は茫然として太平洋の澄んだ光りの中に包まれていた。

此処は四国の最南端の足摺岬、果てしなき美しい海、そして岩壁、松草等有情無情が同時成道し、成仏しているのを、只ただ感動して、この世は極樂淨土、仏の居ませる所は淨土なりと感動し立ち尽くしている。

一昨日、一〇月一〇日『正法眼蔵』九五巻を写し終る。その一五年間の発心修行の功德が斯くあらしめるのだろうか、今全てのものが美しく優しい。

高祖様の最後の御説法が『正法眼蔵』「八大



足摺岬の灯台

人覚」の巻であり、それが釈迦牟尼仏如来の遺教である事に、深い感銘とありがたさを感じて全巻書写し終る。

一は少欲、二は知足、

三は楽寂静と「八大人覚」は続くが、今こうして足摺岬の岩と海に包まれて一人でいると、全ての五欲を離れて、特に自佗を離れることが、最上の寂静と確信する。

思い出せば一五年前、亡母の遺品より『正法眼蔵全講』（岸沢惟安老師）の四巻を見つけ読み始めた。判じ難いが心ひかれ、母の遺言の様におぼえて、高祖様の本文のみを写記するも中々大変、さしあたり「弁道話」「現成公案」「仏性」の三巻を五回程写し、改めて九五巻を完写読すると決心する。

おそらくこの生の中に完写する事は出来な

言葉に励まされて、途中この身滅した時は、滅の道にて弁道すれば良いと、幾度も自分に言い聞かせてここまで至らせて頂いた。この悦びを何故か足摺岬に伝えたかった。岬から九五巻写読完了の感想はと聞かれても、私には答えられない。

この一行一字が私にとっては、正法眼蔵涅槃妙心であり、それを心としての一足、一行、一飯が正法眼蔵であり、自受用三昧であるからです。

それ故にその答えを書こうとすれば、この身の中で六四億九万九千九百八十回の発心修行菩提涅槃の繰り返しを行い、又明日も同じと、それ正法眼蔵涅槃妙心なりとしか答えられず、浅学を恥じ入る次第です。

この岬には二〇年前、四国八八ヶ所歩きを始めて、五巡目の遍路の歩きを二日前から始めて、本日ここに立ち太平洋を望んでいます。

明日から観音崎を通って、石鎚山の方へ遍路する予定、肩に背負った坐蒲が軽い、毎朝四時より、坐禅、写経、正法眼蔵の写読を行じさせて頂く。これが遍路の源の力となり、今日も発心修行菩提涅槃を行じさせて頂く。

海岸の波の音が、そして咲き終りかけた彼岸花が、「この法は、人々の分上にゆたかに

そなはれりといへども、いまだ修せざるには  
あらはれず、証せざるにはうるることなし』、私  
達の小さな彼岸花も、大きな海も、父母未生  
以前の面目は等しく、自他なく、仏の智慧を  
もってつくられたものです」と、私に法を説  
いてくれる。

「智恵出ては偽りあり、才能は煩惱の増長せ  
るものなり」の徒然草の言や良し、修めて行  
ぜざれば、才にとどまる。今日からも又明日  
も歩み、結跏趺坐し、行じる日々を御仏の所  
願にそって行じ、又明日より『正法眼蔵』「弁  
道話」の巻から、改めてこの身心を投入しよ  
うと思う。この身心の滅するまで。不生不滅  
なるが故に。

## 年末托鉢修行で新たな発心

柏市 杉浦上太郎

昨年、一二月一三日、曹洞宗千葉県第二教  
区の恒例行事となっている「歳末助け合い」  
募金活動（托鉢）が行われました。柏駅にほ  
ど近い長全寺に、ご寺院、檀家役員、参禅会  
会員の総勢三〇名ほどが参集しました。

龍泉院参禅会からは、椎名老師のもとに、  
会員の五十嵐嗣郎さん、小畑二郎さん、小山  
斉さん、鈴木民雄さん、田上淳一さんと小生

の計六名が集いました。龍泉院参禅会として  
は、平成一六年から数えて五回目の参加とい  
うことになりました。

折しも、九月に勃発したリーマン・ブラザ  
ーズの経営破綻の余波を受け、毎日、大企業  
の操業短縮、派遣切り問題等がマスコミをに  
ぎわしているときでした。

募金活動をスタートするまで、今年は喜捨  
してくださる方が少ないのではないかと多少  
の不安を抱いておりました。しかし、開始と  
共に、そのような危惧は一掃されてしまいま  
した。午後一時～三時三〇分までの間、喜捨  
される方が長く途切れることはありませんで  
した。一昨年と比べて、金額はともかく、喜  
捨頻度としては、二倍以上になるのではない  
かと思われまます。とくに、若い母親がお子様  
に喜捨させる、中学生や高校生など若い人が  
自主的に喜捨する姿が大変印象的でした。

この不況下にあつて、何とか自分も困つて  
いる人々を助けたいという思いがこもつてい  
ると思ひ、「日本人、まだまだ捨てたものでは  
ないな」と心の中で何回もつぶやき、嬉しい  
気持ちになりました。

このような方々から喜捨いただいたお金は、  
正に仏性に満ち溢れていて、必ず大きな働き



お嬢さんにご老師のメッセージを渡される

をするに違いありません。喜捨いただいた合  
計金額は、九三、五九九円になりました。真  
心のこもったお金です。リーマン・ブラザー  
ズの負債金額六四兆円よりはるかに大きいの  
だと思ひました。

その日、喜捨を受けながら、二宮金次郎が  
説く（\*）「人倫五常の道」をバックボーンと  
した金銭貸借論を思い出していました。以下  
小説『二宮金次郎』（童門冬二著／集英社文庫  
刊）の一説を引用しながら、その内容を紹介  
してみます。

金には徳がある。その徳は人の暮らしを豊かにする。そして豊かになったことを知れば、人間はその徳に報いようとする。徳に報いるということは、自分が働いて得た金を差し出して、他人の暮らしを豊にしようとする。志すことだ。「金を貸す」ということは、貸すのではなく、余裕のある者が、余裕のない者に対して差し出す、つまり推譲（すいじょう）という行為なのだ。

「人倫五常の道」というのは、「仁義礼智信」の五つの人間の道のことです。お金の貸し借りで最も大事なことは約束を守ること。それが「信」です。多少余裕のある人から余裕のない人にお金を差し出すのが必要で、推譲の心といっているでしょう。これが「仁」です。そして借りたほうが約束を守って、正しく返済することを「義」といいます。また約束を守った後、必要な金を推譲してもらったことを感謝して、その恩義に報いるための冥加金を差し出したり、また返済について決して貸し手に迷惑をかけないように心を配ったり、さらに、努力して得た余財を貸付金に当てる時にも、決して威張ったりしないこと、これを「礼」といいます。また、どのようにして多くの余財を生じ、借りた金を早く返す

か、つまり約束を迅速確実に守るかという工夫をすることを「智」といいます。つまり金の貸し借りといっても、こういうように人倫の道である仁義礼智信の五つが必ずともなっているのです。以上

近年、世界の多くの国は、法に触れなければ手段を選ばない、弱肉強食、大いに儲けた者が勝ち組という自由市場経済となりました。その結果、今のような世界の経済恐慌を招いたのだと思います。「物と物」、「金と金」のつながりしかない世の中では、どのような形であれ、必ず破綻するのではないのでしょうか。そこには、やはり「心と心」のつながりが介在しなければならぬのだと思います。

その日、改めて、仏教徒の己の言動が媒介となつて、少しでも、「心と心」のつながりが広がる世の中になる一灯となるべく、尚一層、仏道修行に励むことを決意しました。合掌

\*「人倫五常の道」：「儒教」が説く人としての生きる五つの徳目

▼ご老師が托鉢当日、喜捨された方へ下記のメッセージをお渡しになりましたので、掲載いたします。  
(編集部より)

本日は尊い浄財をご喜捨賜り、まことに有難うございました。私たち曹洞宗千葉県第二教区（野田・柏・我孫子）の寺院一同は毎年このような歳末助け合い托鉢を行い、皆様の善意を集めて恵まれない人々への贈り物のお手伝いを致しております。

お陰様で私たちは有難い修行をさせていただき感謝しております。道元禪師は「仏道の歩みとは自他の対立をなくすことだ」といわれます。私たちは常に他人とくらべっこをして自ら不幸になっています。そうではなく、損得を超えて心から皆と共に生きようとするところに実は深い幸せがあることを教えているのですね。新年も間近、貴下とご家族の真の幸せをお祈り申し上げます。合掌

2008.12.13

龍泉院住職 椎名宏雄 九拜

## 会員便り

●二月八日(日)午後二時より新年会が、ご老師以下一八名参加して、柏市「うどん市」で行われました。最初ご老師から挨拶があり、その中で、「健康であるからこそ坐禅が出来る。七〇代は人生の華である、健康に留意して、終りのない修行を共に勤めたい。」と述べられました。

続いて美川さんの音頭による乾杯で歓談タイムに入り、皆さん鍋をつつきながら、盛んに歓談されていました。一時してから、恒例の全員からの五分間スピーチに移りましたが、弁の立つ皆さんですから、とても五分間では終わらず、話尽きない人は、二次会へ持ち越ししました。坐禅についての所感など、大変参考になるお話も聞け、非常に有意義な新年会でした。

## 龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜九時より(初参加の方は八時半までに来山のこと)、四月は八時半より坐禅作法指導
- 一、坐禅 第一炷 口宣、坐禅三〇分  
経行 一〇分  
第二炷 坐禅三〇分
- 一、講義 木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』のご提唱を聞く。二月より「帰依三宝」の巻
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます
- 一、会費 無料
- 一、一夜接心 六月中旬(本年は六月一三・一四日)一泊し、七炷の坐禅とご提唱を聞く
- 一、成道会坐禅 月例参禅会の他に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜(本年は一二月六日)釈尊成道を讀え坐禅、成道会法要後、法話を聴取、点心を共にする

●二月十五日(日)午後二時より、梅花講との共催による涅槃会の法要が龍泉院で行われました。参禅会からは一三名の方が参加されました。本堂には正徳五年(一七一五)に制作された仏涅槃図が掛けられていました。梅花講の詠讃歌の奉詠で、ご老師を導師とし、参禅会会員が配役についた一行が入堂し、法要が始まりました。法要の最後にご老師は遺教経から次のようなご法話を話されました。「お釈迦様はやるべきことを全て成し遂げられ、満足の笑みを湛えて涅槃に入られた。我々も健康で、やるべきことをやり、コロリと涅槃に入れれば本望である。」

## 沼南雑記

- 九月二八日 三三名  
参禅会記録(内は座談の司会者 平成二〇年)
- 一〇月二六日 (三町 勲氏) 二七名  
(松井 隆氏) 三〇名
- 十一月二三日 (加藤 孝氏) 三〇名
- 十二月七日 参禅会三七名  
成道会 梅花講一三名  
出家得度式(吉岡 大龍氏) 於 天徳山龍泉院

幹事 杉浦上太郎氏

鈴木 民雄氏

●二月一三日 歳末助け合い托鉢

於 柏駅東口

曹洞宗千葉第二教区主催

椎名老師及び会員五名

●二月二八日 三三名  
(五十嵐嗣郎氏)

坐禅・禅講後、大掃除

平成二一年

●一月二五日 三三名  
(戸塚 英明氏)

●二月八日 新年会

於 柏市「うどん市」 一九名

幹事 松井 隆氏

刑部 一郎氏

●二月一五日 参禅会一三名

涅槃会 梅花講一三名

於 天徳山龍泉院

幹事 松井 隆氏

刑部 一郎氏

●二月二日 三〇名  
(美川 恒子氏)

▼昨年の幹事杉浦さん・鈴木さん一年間御苦労様でした。今年は刑部さんと松井さんにお願います。

今年は一〇月頃に良寛さんの史跡を訪ねる旅を予定しています。良寛さんの遺徳を偲び、会員の親睦を深める旅にしたいものです。

●発行 行/天徳山龍泉院 千葉県柏市泉81 0471911609  
●印刷 刷/岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45 0471433131